檀一雄全集——第三卷

雄全集 Ⅲ

石川五右衛門る道

新潮社版

檀一雄全集

第三巻

© Yosoko Dan, Printed in Japan, 1977.

印刷　1977年11月20日
発行　1977年11月25日
著者　檀 一雄（だんかずお）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
電話東京 266 -（業務）5111（編集）5411
振替東京 4 - 808

目次

真説 石川五右衛門 7
新カグヤ姫 285
天鼓 305
降ってきたドン・キホーテ 335
光る道 353
解題 367

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

檀一雄全集

第三巻

真説 石川五右衛門・光る道他

真説　石川五右衛門

稲　妻

遠州浜松――。

その遠州浜松の宿場から、さほど遠くもない海沿いに、味方ケ原という荒野がある。

風にボウボウと吹きわけられる芒のほかは、時々兎をでも追う、鷹か、隼か――そういえば、時々野狐の群が、芒のかげをチョロリと走り過ぎるばかりである。

寅の方角――今でいう北東だ――に天竜を越えて、もう真白に雪をいただいた富士が見える。

いつの頃から流れ移ってきたのか、この淋しい荒野のほとりにたどりついて、半農、半漁、ようやく粥をすすってカツカツに、その日その日の飢を凌いでいる夫婦。

むかしは真田五左衛門といって代々三好家の禄を喰んでいた武士の流れだが、根っからの臆病、弓矢を取ることが大嫌いで、戦乱の中をあちらに逃げ、こちらに走り、とうとうこんなところに迷いこんだ。

が、貧乏神の手からはそう簡単には逃げ出せない。

「ああ、あ。嫌だ、嫌だ。こんな貧乏をするくらいなら、いっそ、泥棒にでもなった方がましだ」

女房のお種がたもとを噛んでボヤいているが、はじめから泥棒になれるぐらいの男なら、何もこんなところで不自由はしない。

亭主の五左衛門が山刀をぶら下げたまま、ブスッとつったってむくれてふさぎこんでしまっている。

どうしたことか、この夫婦、連れ添うて十五年にもなろうというのに、子宝に恵まれない。

五左衛門の甲斐性の無いのにすっかり愛想をつかしてしまっているお種、どうぞして天下を掠めとるほどの、男の子を得たいものだと思っている。

さて、味方ケ原の芒の中にポツンと立っている小さな石祠。誰が祀ったのか、誰を祀ったのか知らないが、お種は亭主にかくれて減法この石祠の信心にこり始めた。

願を立てはじめてから、七七四十九日。雨の日も風の日も怠りなく詣った甲斐があったものかどうか、丁度五十日目の朝まだきに、五左衛門とお種、抱き合ってぐっすり眠っていると、異形の者がお種の夢枕に現れた。

雲つくばかりの大男。眼はランランと輝いて、しばらくお種の眼の前にヌックとつっ立っていたが、

「汝、我を祈ること切なり、依てその心根に銘じ、一子を授けんが為、しばらく汝が胎内を借りるぞ」

大音声に呼ばわったと見るまに、土足のままドサドサとお種の口の中から踏みこんでいって、やがてお種の体にズシンと響くものが感じられた。

はじめは半信半疑、夢の話を亭主の五左衛門とも語り合ってみたが、正夢のような、逆夢のような、至極頼りない夢である。

それでも石祠の信心は欠かさず通いつめていたところ、月々キチンキチンときまったように欠けたことのない月のものがピタリととまった。

お種の喜びようといったらない。しかし、そこは女の浅間しさ、子をはらんで、愚痴の鉾先は先ず弱い亭主に向ける。

「ねえ、あなた。こんな貧乏で、一体、産衣などどうするつもり？」

「産衣？」

「無いでは済まされませんよ。ああ、嫌だ、嫌だ。つくづく貧乏が嫌になる」

どうも女の信心というものは欲の深いものである。子種を授かったとなると一心不乱、お礼詣りはよいが、いちいち亭主への不満を石祠にぶちまける。

初めのうちは、それでも、兎に角男の子であればよい。男の子を授け給え、とそれだけを念じていたが、そのうち段々と欲が出てきた。

亭主の脛の細いのが気に喰わないとなると、早速その翌る朝は、

「どうぞしておん神様。今の主人の倍くらいな脛を持った男の子を授け給え」

さて我家に帰りついて、つくづく五左衛門の顔を見て、このクヨクヨとしたチンマリ顔がすべての貧乏の原因だとでも思いこむのか、

「どうぞして、おん神様。せめて今の主人のクヨ〳〵顔の倍ほどもあるゆったりとした大顔の男子を授け給え」

家に帰って亭主の物腰を見れば見る程、よくもこんな主

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人と十五年も連れ添ってきたものだ、鼻も低過ぎれば、眼も口も小さい、髪も薄ければ、力も弱い、肝ッ玉ときたら蚤ほどもあるだろうか、と気がついて、あわててその翌る朝はまた石祠にかけつけ、

「どうぞして、おん神様。鼻も口も眼も大ぶりで、髪と鬚はモジャモジャと黒く、臂力優れ、肝ッ玉は千畳敷程の大器量の男の子を授け給え」

そこでひどく安心して我家の閾をまたぎ、洩れはなかったろうかと亭主の顔をもう一度あらためなおす。

「ねえ、あなた。今度生れる男の子は、眼も鼻も口も大ぶり。髪とヒゲはモジャモジャ。ちょっとあなたの倍ほどもある顔形。脛は長く、肝ッ玉は千畳敷ほどもあろうか——」

ともうきまったことのように自慢をする。亭主の五左衛門は自分への面当てだろうと心穏やかならず、

「そんな男が貧乏してでもみろ。恰好も何もつくものか」

なるほど、これはしまったと女房はあわてて石祠の方に引かえし、百度ばかり額ずいて、

「どうぞして、おん神様。日本国中の金銀財宝、残らず寄せ集める程の男の子を授け給え——」

聴きとどけられたものかどうか、石祠はシンと鎮まりかえって、原一めんの芒の穂がザワザワと揺れている。

さて、冬が深くなるにつれて、お種のお腹の方だけは確実にふくれてゆくが、五左衛門の懐ろ具合は細る一方。

始終おどおどと女房の顔色、いや、お腹の模様を気にしている。

五左衛門の生活と云えば、先ずお種と二人して馴れない鍬をふるって作っている、僅かばかりの田と畑。それに天竜河口のあたりに糸を垂れて釣る魚。時折まあ、味方ケ原でワナにかかる狐の類。

今年は颱風のせいもあって、米の出来が格別に悪かった。だから朝夕の粥は粥でも粟粥や稗粥だ。

現金の収入は全くない。狐が二三匹でもかかってくれると、こいつを街道筋まで持ってゆけば、二三反の衣類には換えられようが、どっこい、五左衛門のワナに引掛るような狐は万に一つだっていやしない。

それより五左衛門が狐の方から化かし取られないのがよっぽど不思議な話だ、とこれは女房のお種がつねづね腹の中で思っていることだ。

冬だと云うのに、よれよれの単衣(ひとえ)を一枚、貧乏ぶるいがおさまらない。

「ほんとうに、どうして下さるの。腹帯一つ巻けやしないじゃないの」

「よし」

と五左衛門は例の通りなまくらの山刀をガタつかせるが

何も思案があってのことではない。
「あなたの子供だったら、どんなひもじい目に合わせたっていいか知れないけど、これは味方ケ原の石神様の申し子なのよ」
「うむ……」
と肯いているのか、唸っているのか、相変らず山刀が鳴るが才覚のない男の生返事ばかり、何遍聞いてもかえって頼りなくなるだけだ。
「この子さえ育てば、もうあなたの御世話になんぞならないから――」
「うむ……」
「ちょっと触ってみて御覧よ。ほら、お腹に両足をふんばって……」
毎日粥ばかりすすっているのに、これはまたよくふくらんだ。五左衛門はそのパンパンに張った太鼓腹をさすってみて、ぐぐっと胎動の手応えを楽しんだが、
「だからさ、何とかして頂戴よ。大きな山刀だってだてじゃあるまいし」
女房の声に一間ばかり、飛びすざる。おろおろと土間のあたりをうろついてみたが、思案も何もないままに外に飛び出した。
月天心。尚更寒い夜風が芒にざわめいて、人を小馬鹿にしたような狐の啼声が、ケケケーンと続いている。
「よし、俺も男だ。追剝ぎ、辻斬やってみるか――」
ヒョロヒョロ、ヨロヨロ、風にあおられるようにして、それでも街道の方に急いでいった。
五左衛門は一度往還まで出ていった。けれどもどうも喉のあたりがしびれたようになって、唾が満足に飲みこめないようなあんばいだったから、街道を見下ろせる芒の原まであとがえって、その芒の中にヘタヘタとしゃがみこんだ。
月だけがばかに明るかった。
膝頭のあたりがガタついてかなわない。やっぱり追剝なんぞというものは、銀メシを鰹腹喰ってからでないと、やれないものである。それなのに、とてもこんな粥腹では――。
いくら待っても、シンとして、人影は見えなかった。が、これがまあ、仕合せというものだ。開業早々、そうそう矢鱈に出られたんでは――とどちらが一体出るつもりなのか、この追剝、心細いことおびただしい。
往還が白い帯のように月光を浴びている。まあ、泥棒らしく野糞でもやるか、とこの思いつきは、五左衛門もちょっと楽しかった。しかし頼りないグズリ腹だ。月並の泥棒様ほどの豪勢な糞も出ない。
折から月の道に人影が現れた。五左衛門は上わずった。

ヘッピリ腰が上げられない。膝から下が萎えてしまって、無用にカタカタと顫えがきた。

えらく強そうな野武士である。五左衛門、眼をつむる。南無三宝、念じながら、ゆっくりとやり過ごした。

どうも今日は駄目である。日が悪いに相違ない。引返そうかとも思ったが、家の女房のうらめしげな顔と、あのパンパンに張った太鼓腹を考えるとやっぱり腹帯と、産衣一枚だけは物にしないとさすがの五左衛門も帰りにくい。

もう一人待つ——。今度こそやって見せるぞと五左衛門は一度芒の中に立上ってみたが、貧乏ぶるいがまだとまっていないようだった。芒と一緒に体ごと揺ぶられているような頼りなさだ。

そっとしゃがむ。

来た、来た。今度は反対側からだった。五左衛門、観念する。それにしても山刀をさげていたら追剝と間違えられやしないかと突嗟に思案して、芒の中に刀をかくして飛び出したのは、どういう心の作用からだったろう。

何喰わぬ顔。何喰わぬ顔で一生懸命歩こうと思ったが、体がよろけた。

そのよろけたところが気味悪かったのか、相手の男は胡散臭そうにちょっとよけた。しかし、やっぱり五左衛門の思惑通り、刀も何も持っていないのをたしかめて安堵したのか、

「今晩は」

「はい、今晩は」

と五左衛門はよろけながらピョコンと一つお辞儀をして、何となく嬉しかった。土地の商人か何かだろう、擦れちがって、後ろを見い、見い、行き過ぎる。五左衛門も振りかえり振りかえり歩いていった。

が、俺は追剝だ。そうだ追剝。五左衛門あわてて、芒の中にとびこんでいって刀をさぐったが見当らない。ジャレ猫のように目茶苦茶に芒をかきわけて、ようやく山刀を探し出した時には、芒の葉で腕は血だらけ——旅人の姿はもう見えない。

何遍奮い立ってみても五左衛門の追剝は、一向に物にならない。

人間、あきらめが肝心だとその都度あきらめて、女房の尻のあたりまでスゴスゴと戻ってくるが、女房の腹の方はふくれる一方。

「あなたに泥棒しておくれとまで頼みはしないけど、でも赤ん坊の産衣だけはねえ——」

五左衛門、天を仰いで長嘆息するのである。

しかし運という奴は、これはある。いよいよお種が臨月に入ったという梅雨明けの頃。五左衛門、天竜川に釣りに

出た。魚の方は一匹もかからなかったが、水にプカプカと浮んで、岸の方へ流れよってくるものがある。
白いうちかけのようなものが水にすいてゆらめいて、桑原、よく見ると女の水死人のようだ。五左衛門は肝を冷やし、念仏を唱えながら逃げ出したが、待てよ、悪いことだが、死んだお方には、あのうちかけ、無用のように存じられる。
そこで裸になって褌一貫、ググーと水にひきさらわれそうになりながら、白無垢一枚だけ拝領に及んだが、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、上ってきた時には唇蒼ざめて、阿呆のようになっていた。
そこから川上の方に歩き、白無垢を水の中に揉みに揉んで、川岸の猫柳にひろげ、乾しあげると何喰わぬ顔で、我家に戻る。
「まあ、こんな物、一体どうしたの？」
お種が驚いて見上げる顔に、
「ヤッター」
とだけ答えている。五左衛門の足がふるえているのが、お種にはよくわかった。
「まあ、女の人なんどから剝ぎ取るなんて」
「ヤッター」
五左衛門は、それを繰りかえすだけで、とんとお話にならない。
それでも、これがあれば、無事に赤ん坊もくるんでやれると、貧の底の浅間しさで、深くは聞かず、あわてて、赤子の着物を縫い上げる。
とこうするうち、月が満ち足りたのか、俄かに女房産気づき、五左衛門はただおろおろと走りまわるだけだが、勿論取上げ婆とて呼べず、気丈のお種は初産だというのに、健気にも自分で産みおとした。
オギャーオギャー
これはまた盛な初声。焼け箸で臍の緒も切る。
五左衛門はふうふう言いながら釜をわかし、盥に湯を張って、抱え上げてお湯を使わせて見ると、出かした。二貫匁近いかとも思われるような大赤ん坊。
「おい、男だ。男だ」
「その筈ですともさ。して、顔は？」
「顔？」
「大きいかえ？」
「おう、世間並の赤ん坊の倍程もあろうか、のう」
つくづく見れば見る程、何となく末頼もしい男の子だ。世間なみな子から云えば、顔も倍、手足も倍、眼、鼻、耳、口、と何によらず一周りだけ、ゆったりと造作が大きく、生れたての赤ん坊の癖に、手足をちぢこめることもなく、

おそれげもない模様で、お湯の中にダラリと両手を投げだしてうかべている。
どうも云いようのない大器量で、これが我子かと五左衛門狐につままれたようだが、鳶が鷹を産んだとはこのことだろう。
今時の生物学や進化論から云ったらどんなことになるのだろう？　さだめし、突然変異とか何とかうるさいことになりそうだが、いやはや、誠に驚き入った赤ん坊だ。
けれども、どう云うか、見ていて見飽きが来ない。五左衛門、盥にうかべて我子の顔形をためつ、すがめつ、しかし息子の方は貧乏親父の五左衛門なんかてんで眼中にないようなあんばいで、まだ眼もしかと開かない癖に、つまらなそうな大欠伸を二つ三つやらかし、意気まさに天をのむといった有様だ。
五左衛門もようやく我に帰り、盥の息子を抱きあげて、例の白無垢の産衣に包みこんでやる。無事後産も済ませてほっと一息ついている女房のお種に見せてやると、お種の喜びようといったらない。
「有難や、勿体なや。この子は正真正銘石神様の申し子なんだから、お父っつぁんもあんまり粗末に触っちゃ、いけないよ」
「そうとも、そうとも——」
と五左衛門、筵に手をついて、我子の顔をもう一度覗きこむがうっかり赤ん坊に触れもしない。
「あなたの子だなんて思ったら大間違いなんだから」
「そうともさ、そうともさ」
と五左衛門は相槌を打つものの、喜んでいいのか悲しんでいいのか、全く自信も何もなくなった。
「まあ、お父っつぁんは意気地無しだけれど、この子はいずれ天下をかすめ取る子なんだから。今に、金銀財宝、ガラガラとこの子の身の周りに流れ寄るんだよ。それまで、私もせいぜい永生きがしてみたいもんだわね」
さて、赤坊主、翌る朝はゆったりと眼を開いた。
「おい、母ちゃんや。この子の眼の玉の中には黒目が二つずつあるぜ」
五左衛門は、朝方、赤ん坊の拝観に及んで、妙なことに気がついた。お種も一心に我子の眼の玉の奥の方をのぞきこんでいる。
なるほど——。二つとも云えないが、満更一つとも云えない。眸が回転している車輪のように重ったり、はずれたりするように見える。
これを重瞳、または双瞳というそうで、またの名を車輪眼、五左衛門もお種も、この不思議に揺れ廻る赤ん坊の眼の玉をのぞきこみながら、

「うむ」

とただうなってしばらく感嘆の吐息をついた。

ここに一説があって、重瞳というのと双瞳というのは、似て非なるものだということだ。重瞳というのは黒目が二つ重って云ってみればまあ金環蝕のお天道さまとお月様と云った具合になっている。

その眼が動くと、黒目のお天道様とお月様が少しずつズレ合って異様な輝きを帯びるという——これを俗に仏眼といって大層珍重する眸子だそうで、むかし空海上人も重瞳、豊臣秀吉が重瞳だったということである。

双瞳というのは、いささかこの二つの黒目の分離がはなはだしいわけで、つまりお天道さまとお月様とが分離して、瞳が二つ並んで見える。一つ眼玉の中に二つの黒目が丁度車輪のようにクルクルと回転しながら並び合っているから、俗に車輪眼と呼ぶそうで——。

この車輪眼も智識才覚衆に立超え、古今無双の豪傑になる眼玉だそうだが、また同時に大変剣呑な眼の玉だそうで、古くはかの弓削の道鏡、近くは由井正雪が車輪眼であったということである。

どこまでが仏眼で、どこからが車輪眼であるかということになると、大変むずかしく、生きている人間の眼の玉のことだから、絶えず揺れ動くだろうし、激すれば車輪眼になり、和すれば仏眼になるといっておいた方がよいだろう。

そこは修養次第、心を鎮めて鍛錬すると、車輪のようにはずれてしまっている二つの黒目もいつのまにか重って、仏の慈光を発するかも知れないし、折角の仏眼が、妄念の阿修羅道に迷い込んで、次第に車輪眼に変ることもあるだろう。

要するに、重瞳といい双瞳というもよく動く、旺盛な活力のある人の眼の玉のことであろうし、世俗のコセコセにとりつかれている人の眼はその黒眼がいつの間にかドンヨリと濁ってしまって、目先の出来事にしか焦点が結ばないものだから間違っても重瞳や双瞳だなどと思われる気づかいはない。

ところで千年をにらむような人の眼になると、目前の世相をにらむ眼が一つ、千年の大きな時間をにらんでいる眼がもう一つ、つまり同じ黒眼は一つでも、二つの黒眼が同時に一尺先と一万尺先とをにらみまわしているように、はたからは奥深く見られるもので、これを仏眼、または車輪眼などと呼んで尊びおそれたものであろう。

さて五左衛門の息子、まだ生れて日も経たないと云うのに、眼の玉の奥に焔のようにランランと燃える光あり、五左衛門とお種がのぞきこんで見ていると、その黒眼が一つの眸の中でまるで火の車でも廻しているように二つ並んで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.